

悠久の京を訪ねて

Vol.4



京は古より人々が集い、その気候・風土を織り交ぜ、日本の中心地として生活が営まれてきました。それは京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により縄文、弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのかを知ることが、これからの生活を考える上でも重要な事だと言えます。出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

かみ こま きた

上狛北遺跡 — 古代人が書いた文字 —

京都府木津川市



よみがえる古代文字

遺跡から出土する古代の文字資料には代表的なものとして木簡や墨書土器などがあります。木簡は細長い板などに字を書いたもので、文書や荷札などがあります。木簡は、表面を小刀で削って再利用されたため、その削り取られた削り屑にも文字が残っています。墨書土器は、当時の食器の裏などに墨で文字が書かれたものです。古代には、文字を知っている人が役人や僧侶など特定の人々に限られていました。このことから、文字資料は、一般の集落よりも役所や寺院、貴族の邸宅など文字を必要とした人に関係する施設でたくさん出土します。

文字資料が語るもの

木津川市上狛北遺跡では、奈良時代の木簡やその削り屑、墨書土器などが出土しました。ここでは木簡の削り屑と墨書土器を紹介します。上狛北遺跡で出土した削り屑には「連連」や「長長」・「段段」など漢字を連続して書いたものがありました。当時の人が字を練習したときに書いては削り、書いては削りした様子がうかがえます。墨書土器には出土した約30点のうち「代」と書かれたものが半分以上もあり

ます。この「代」の意味は不明ですが、字の書体や筆使いをみると少なくとも3種類以上あります。このことから少なくとも3人以上の人が作業をしていたことが分かります。このように、出土した文字資料をみると書かれた内容だけでなく、当時の風景などもみえてきます。



上狛北遺跡で出土した木簡の削り屑「連連」(写真左)と墨書土器「代」(写真右)